慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白詩受容考：「香爐峯雪撥簾看」について
Sub Title	On how the poetry of Po Chü-I was received inJapan : in the case of 'Hsiang-lu Fêng hsüeh p'o lien k'an'
Author	太田, 次男(Ota, Tsuguo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1974
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.33, (1974. 2) ,p.1- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00330001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

白詩受容考

――「香鑪峯雪撥簾看」について――

太田次男

白氏文集巻十六所収の詩「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首」（0975―0979）（以下、香鑪峯下詩と略称）の第四首のうち、副題に掲げた一句は、現在では、詩そのものとしてよりは、枕草子の故事を通して周く知られている。

ただ、その故事の中心をなす「簾を高くあげる」ことが、原詩の「撥簾看」と、如何ように関連しているのか、未だ充分の考察が加えられたとは云い難い。筆者は、曾て、先輩の驥尾に付して、若干、この点に言及したことがあるが、(1)更に、改めて、検討を必要とする。後に述べるように、「撥簾」の語は、白詩の一例を除けば、全唐詩をも含めて、管見では、中国の詩の中には見出されず、謂わば、白氏得意の造語であると見做し得よう。

ところが、わが国に於ては、菅原道真が夙にこの語に注目し、その詩作の中に取入れて、四度に亘り試みている。また、平安末期にも、他に例がある。それに、枕草子の故事をも合せれば、中国では殆んど顧みられなかった言葉が、わが国では意外な反響を呼んだということになる。

いま、先ず、この詩が成立した背景に触れ、次で、『菅家文草』等の邦人漢詩文集、及び『枕草子』の当該個所について、当時の訓点や和文の用例をも参照しつつ、考察を加えることにする。

註（1）神田秀夫「白楽天の影響に関する比較文学的一考察」（「国語と国文学」昭和二三・一〇、一一月号）及び、拙稿「平安時代に於ける白居易受容の史的考察」（上）（「史学」三二―四　昭和三五）参照。

一　(1)

先ず、この香鑪峯下の詩成立の周辺に触れて、詩そのものの理解の一助ともしたい。〔引用の白氏文集の巻次、及び、本文は元和四年刊那波古活字本による。但し、金沢文庫本現存巻については、金沢本々文に従って、本文を改めた個所もある。訓点については、原則として、白氏文集万治刊本に拠ったが、私に改めた個所も存する。作品番号は花房英樹『白氏文集の批判的研究』所載「綜合作品表」に、また、白詩以外の詩の作品番号は『唐代の詩篇』（京大人文科学研究所編）に拠る。〕

白氏の官僚としての生活を省みると、元和二年（807）の翰林学士（三十六歳）、翌年から同五年までの左拾遺の時代が、天子の側近に侍する諫諍の官として、兼済の理想を掲げて、最も積極的に政治的活動がみられた時期である。ただ、その建言や政治・社会詩には、時に痛烈な言辞も含まれていて、為政者側からの反発も強く、遂に、名教上からの批判に擦り替えられた政治圧力も加わった為、(1)程なく、司馬として、江州へ流謫された。

江州司馬時代は元和十年（815）秋から、同十三年末、忠州刺史に転ずるまでの四年に亘り、白氏、四十四歳から四十七歳までの間に当る。香鑪峯下の詩はその第三年に作成され、また、著名な「琵琶引」の作成は、その前年である。

江州到着直後に、その文学論ともいうべき「与二元九一書」（巻二一八・1486）が書かれた。元九とは、いう迄もなく、親友元稹である。その末尾に、

潯陽曠月江風苦レ寒。歳暮鮮レ歓。夜長無レ睡。引レ筆鋪レ紙悄二然燈一前。有レ念則書。言無二次一第。勿下以二繁一雑為上レ倦

とあり、その内容からみても、従来の主張がこういう形で整理されたといえる。同時に、自撰の詩文集十五巻が用意されている。とす

れば、文学史的見地に立ってみれば、この文学論と詩文集とをもって、白氏の第一期は終了したといえよう。従って、江州時代は、次の新しい時代への出発ともいえる。

白氏は、韓愈などとは稍〻異り、長安を離れた勤務地や、流謫の地に於ても、夫々、異ってはいるが、己が詩作の養分となるものを吸収している。短期間ではあるが、仏教の一中心地である廬山に近い江州の地にあって、政治上はともかくとして、内的活動は活潑であり、その詩にみえる寺院だけでも、「東林寺」「西林寺」「大雲寺」「宝称寺」「大林寺」等があり、何れも、白氏の精神生活に大きく影響したことを示している。

江州時代の心情を、元和十二年の「東南行一百韻」(巻一六・0908)より抄出すれば、

渭北田園廃。江西歳月徂。憶レ帰恒惨澹。懐レ旧忽踟躕(中略)

日近恩雖レ重。雲高勢却孤。翻レ身落二香漢一。失レ脚倒二泥塗一(中略)

沈冥消二意気一。窮餓耗二肌膚一。防レ瘴和二残薬一。迎レ寒補二旧襦一(中略)

兀兀都疑レ夢。昏昏半似レ愚(中略)

壮志因レ愁減。衰容与病俱(下略)

などに、略〻盡される。これに類似する感傷の言葉は、他の詩中に於ても屢々吐かれている。「窮愁自要三酔如レ泥」(巻一六・北楼送客帰上都 0922)や「酒狂又引三詩魔一発」(巻一七・酔吟二首ノ二 1065)の如く、酒に溺れ、それがまた、詩作にも連なっている。四年間の時の経過は、表現に若干のニュアンスの変化を齎しはするが、摧折の身を思い、流謫の愁は抑える術とてない。

また、司馬とはいえ、官僚の身としては、たとえ、

年長身転慵。百一年無レ所レ欲(因沐感髪寄朗上人二首ノ一 巻一〇・0515)

とはいっても、淮西の寇が未だ平がざる報に接しては、

愚計忽思飛二短檄一。狂心便欲レ請二長纓一。従来妄動多如レ此(巻一六・0960)

のごとく、憤然として流謫の身をも忘れる。或いは、「題旧写真図」（巻七・0325）に於て、

我昔三十六。写貌在丹青。我今四十六。衰顔臥江城

という現状を認めつつも、最後に、

形骸属日月。老去何足驚。所恨凌烟閣。不得画功名

と、書き加えることも、決して、忘れてはいない。

自から「憂人」「煩悩多心焦」「病心情」[2]などを認めた白氏は、それを克服すべく、前述の如く、多くの寺院に参じ、或いは、道士に問うなど、散閑の身であることは、求道のためには、寧ろ、好都合であった。

こういう、安静を求める白氏の内的活動の中で、かなりの比重を以て認めらるべきものが、自然との交渉である。

流謫という外形は同じであっても、二王の変に連坐し、十年の永きに亘り、配流の地永州に在った柳宗玄には、その憤悶の情を散じうるものは、唯、山水があるのみであり、その山水遊は、やがて、昇華されて、絶品「永州八記」となった。

柳宗元の、山水に対するその純粋さと激烈さには、前提として、先ず、自己と山水との鋭い対峙――寧ろ敵対――が認められる。[3]ところが、白氏にとって、江州の自然は、辺境の地には相違ないが、己れに対峙するものではなかった。そして、四年間の江州生活の中には、既に早くから、その萠芽がみられた自然回帰の思想が、一層顕著に窺えるのである。

そこで、次項に於て、草堂についても、少しく考察しよう。

註（1）花房英樹『白居易研究』五五頁。

（2）「其奈長沙老未還。赤嶺猿声催白首。黄茅瘴色換朱顔。誰言南国無霜雪。尽在愁人鬢髪間」（酬元員外三月三十日慈恩寺相憶見寄　巻一六・0990　元和十二年）

「衰相来何速。応是煩悩多。心焦血不足」（因沐感髪寄朗上人二首ノ一　巻一〇・0515　元和十二年）

「草香沙暖水雲晴。風景令人憶帝京。還似往年春気味。不宜今日病心情」（寒食江畔　巻一六・0965　元和十二年）

（3）拙稿「柳宗元の山水記について」（「斯道文庫論集」第三輯）

元和九年八月、白氏は藍田の悟真寺に遊び、「遊悟真寺詩」(巻六・0264)、一百三十韻を作った。この時、既に翰林学士を辞し、京兆府戸曹参軍に転じており、失意の時代であった。その詩を抄出する。

我本山中人。誤為時網牽。牽率使読書。推挽令効官。
既登文字科。又忝諫諍員。拙直不合時。無益同素飡。
以此自慙惕。戚戚常寡歓。無成心力尽。未老形骸残。
今来脱簪組。始覚離憂患。及為山水遊。弥得縱疎頑。
野麋断羈絆。行走無拘攣。池魚放入海。一往何時還。
身著居士衣。手把南華篇。終来此山住。永謝区中縁。
我今四十余。従此終身閑。若以七十期。猶得三十年。

この中にみられる「本山中人」とあるのは、江州流謫の後、元和十二年、香鑪峯下に草堂を構えた時の作にも、

言我本野夫。誤為世網牽。時来昔捧日。老去今帰山。
倦鳥得茂樹。涸魚反清源。(巻七・香鑪峯下新置草堂即事詠懐題於石上 0303)

の如く、全く同趣旨が述べられ、これらを、既に早く永貞元年(805)に詠ぜられた、

日出塵埃飛。群動互営営。営営各何求。無利与名。
而我常晏起。虚住長安城。春深官又満。日有帰山情。(巻五・早送挙人入試 0180)

にみえる「帰山情」とも併せ考えれば、白氏の、自然に対する一貫した心情が認められる。

このように見てきて、始めて、同じく、香鑪峯下の山居の記である「草堂記」（巻二六・1472）の、

山北峯曰香鑪峯。北寺曰遺愛寺。介峯寺間。其境勝絶又甲廬山。元和十一年秋。太原人白楽天見而愛之。若遠行客過故郷恋恋不能去

にみられる、特に「太原人」を冠称した意味も、一層切実に感ぜられる。

江州の地に於て、この草堂が求め得られる以前にも、

朝詠遊仙詩。暮歌采薇曲。臥雲坐白石。山中十五宿。

行随出洞水。廻別緑巖竹。早晩重来遊。心期瑤草緑（巻七・出山吟 0293）

の如く、屢々出遊し、「二年踏遍匡廬間」（巻二二・朱藤謡 1430）という程であった。

しかし、より自然に近づいて、白氏がいう、山水を喜ぶ「病癖」[1]を満足させ、「身自由」[2]が得られ、求道にも適する場所を求めるとすれば、更に一歩進んで、

已任時命去。亦従歳月除。中心一調伏。外累尽空虚。

名宦意已矣。林泉計何如。擬近東林寺。渓辺結一廬（巻七・歳暮 0294）

と、山居を求める方向へ動いてゆくのが自然の成行であろう。元和十二年、「与微之書」（巻二八・1489）の中で、白氏は新たに得た草堂について、

僕去年秋始遊廬山。到東西二林間。香鑪峯下。見雲木泉石。勝絶第一。愛不能捨。因置草堂[3]

と説明している。「五架三間」「二室四牖」の規模をもち、素木、粗壁の山居がこれである。この時、恐らく白氏は白衣を纒うこともあったであろう。[5]

白氏にとり、山居に住するということは、

欲居其中。参禅養素（巻二三・祭匡山文 1451）

不唯耽二甑水石一。以楽二野性一。亦欲下擺二去煩悩一。漸帰二空門一上（同・祭二廬山一文 1452）

の如く、切実な内的要求に出るものであった。やがて、

外適内和。一宿体寧。再宿心恬。三宿後頹然嗒然。不知其然而然（草堂記）

といい、また、

毎一独往。動弥二旬月一。平生所レ好者。尽在二其中一。不二唯忘レ帰。可二以終レ老（巻二八・与微之書）

と述べ、山居に満足の意を表明している。

元和十二年七月に、中央に於ては、親しい崔群が相となり、これにより、白氏の前途は好転する。中央の知友への、再度の、書簡の内容からすれば、(6) 何れは転出することを或る程度予期し、寧ろ、期待すらしていたと思われる。その忠州刺史転出は、翌年末に実現した。然しながら、

司二馬歳一秩満。出二処行一止。得二以自一遂。則必左手引二妻一子一。右手抱二琴書一。終二老於斯一。以成二就我平生之志一（草堂記）

という当時の覚悟も、単なる空言と見做すべきではない。

白氏の求めたものは、人為の浮動を越えた自然であり、そこには拘束のない自由が存する。それは同時に、禅などの仏教思想とも重なって永遠性を保持する。香鑪峯下の草堂は、ここに住する者に、こういう自然を味わしめるに足りる場所であった。(7)

江州の四年間は、白氏に内省の機を与え、以後の詩にも影響する所は少くはない。ただ、その詩が、無論、草堂にて作られた詩をも含めて、特に深刻になったり、難解になったわけではない。その基調は、依然として、平明であり、その思想も常識的であるので、殆んど何の抵抗も無く、わが国に受け容れられている。しかも、わが国には、古くから、流謫者に対する同情は強く、また、その詩は、すべて、官僚としての生き方の根本に触れるので、わが文人達にも切実な問題を含んでいた。

註（1）「予自思。従レ幼迨レ老。若白屋若朱門。凡所レ止。雖二一日一二日一。輒覆二簣土一為レ台。聚二拳石一為レ山。環二斗水一為レ池。其喜二山水一病癖如レ此」（草堂記）

（2）「身心一無レ繫。浩浩如二虚舟一。富貴亦有レ苦。苦在二心

危レ憂。貧賤亦有レ楽。楽在二身自由一」（巻七・詠意0298）

（3）「三間両柱。二室四牖。広袤豊殺。一称二心力一。」（巻二六・草堂記）とあり、また、「五架三間」（巻十六・香鑪峯下新卜山居草堂 0975）ともいう。

（4）草堂内の素屏についていう。「吾不レ令レ加二一点一画於其上一者。欲二爾保レ真而全レ白」（巻二二・素屏謡 1429）この「保レ真」は、当然、素木、粗壁等にも適用されて然るべきであろう。

（5）「仍開二草堂一。平二治行一道路一。安二置坐一禅牀一。手一板支為レ枕。頭一巾閣在レ牆。先一生烏几一烏。居一士白衣一裳。竟レ歳何会悶。終レ身不レ擬レ忙。滅二除残夢一想一。換二尽旧心一腸一」（巻一八・郡斉暇日憶廬山草堂 1111）

（6）詩についてみても「江西裴常侍以優礼見待（下略）」（巻十七・1088）は「壮一心直一気未二全銷一」で結ばれる。また、「除忠州寄謝崔相公」（同・1090）で、忠州転任を友人崔羣に謝している。

（7）同じく流謫の身ではあっても、韓愈や柳宗元と違って、白氏は官僚としての拘束された境遇を詠じ、切実に身の自由を求める詩が際立って多い。柳宗元の永州流謫は、白氏のそれに比し、遙かに厳しい環境にあったが、詩的饒舌は、寧ろ意外という程少なく、その窮愁の情は、専ら「永州八記」という短文に凝縮された。つまり、流謫や拘束に対する反応の仕方が、独自であり、白詩では、一種の生活詩として、内心が縷縷として述べられた。この時代のものを含めて、この種の詠嘆の言葉こそ、わが平安朝文人達にとって、最も共鳴するところであった。

二 (1)

ここで、本題の詩に入る。香鑪峯下の詩五首のうち、先ず、主題の第四首全体を引く。（本文・訓点は共に管見抄本に拠る）

日一高睡一足猶慵レ起。小閣重レ衾不レ怕レ寒。遺一愛一寺鐘欹レ枕聴。香一鑪一峯雪撥レ簾看。
廬山便一是逃レ名地。司一馬仍為二送レ老官一。心一泰身一寧是帰一処。故一郷何独在二長安一

註(1)「撥」、わが国の白氏文集古鈔本及び日中の刊本類、すべて「撥」に作る。和漢朗詠集古鈔本のうち、御物伝行成自筆本・同近衛家蔵本の二本のみ、何故か「巻」に作る。これに就ては後述する。

(2)「廬山」、わが国の古鈔本「廬山」に作り、刊本類「匡廬」に作る。

(3)「何」、わが国古鈔本「何」に作り、刊本系諸本は「可」に作る。但し、明馬元調校刊本は「何」に改む。

わが国では、『千載佳句』や『和漢朗詠集』以来、この中の第三句・四句のみが、断章されて広く知られている。無論、一首の中では最も主要な句には違いないが、この句が単なる素材としてではなく、また、概念的な理解に止まらないためにも、一首が全体として、更に、出来得べくば、連作五首として鑑賞される必要がある。(1)

白氏は、同趣旨の詩を、時に応じて屢々作ることがあるが、江州時代の作で、内容上これに近いものを求めれば、

転レ枕重安寝。廻レ頭一欠一伸。紙窻明覚レ暁。布一被暖知春。
莫レ強疎一慵性。須レ安二老一大身一。鶏鳴一覚レ睡。不レ博二早一朝人一（巻十七・暁寝 1066）

や、これは長慶三年（823）、杭州刺史時代の作ではあるが、

睡足心更慵。日一高頭未レ裹（巻八・0362）

などは、香鑪峯下詩を、補足するに足りよう。

連作五首のうち、第二首に「喜二入レ山一林初息レ ヒ 影。厭二趨レ朝一市久労レ ヒ 生」とあるのは、白氏の実感として、そのまま受取れるが、「従レ茲耳一界応二清一浄。免レ見ニ 啾一啾毀誉声一」（第二）や「宦一途自レ此心長一別。世事従レ今不レ言」（第五）「故一郷何独在二長安一」（第四）とはいうも、更に、結句「還有二一一条遺レ恨事一。高一家門一館未レ酬レ恩」などをみれば、長安―つまり白氏のいう「朝市」―が、未だ心中に占める比重は、決して軽くはない。これは、流謫のわが身を顧みつつ、否定しようとして否定し得ない長安での官僚としての活動への期待と、この草堂に於ける静閑なる生活との、この二つの生き方が、未だ、充分調和せず、内心に併存し、対立しているとみられる。

とすれば、ここには、確かに、一応安息と身の自由とは存するにしても、その閑無事には、猶、憂傷、憔悴、倦怠等を伴っていたことは否定すべくもなかろう。

次に、草堂と香鑪峯との関係については、

三間茅舎向山開（巻十七・別草堂三絶句ノ三 1097）

とあり、また、

楽天既来為主。仰観山俯聴泉（草堂記）

微之微之。作此書。夜正在草堂中山窻下（中略）拳頭但見山僧一両人。或坐或睡（巻二十八・与微之書）

などに拠れば、当然のことながら、山と草堂との距離はそれ程遠くはないし、室内から香鑪峯を仰観することが出来た。

また、「小閣重衾不怕寒」の一句は、かえって、外界の寒気の迫るのを感ぜしめる。そして、雪の香鑪峯については、詩と同じ頃に書かれた「草堂記」に、

冬有香鑪峯雪。陰晴顯晦。昏旦含吐。千変万状。不可殫紀。觀縷而言

と述べられている。これは、短期間の遊覧者の言ではなく、長期に亘り、折に触れてこの山を仰ぎ観ている者にして始めて発し得る言葉といえる。(2)

こうみてくると、「撥簾看」とは、ごく普通にみられる、簾を高々と巻き上げて、山を看る、ということを表現したものではなく、そこには、心理的屈折があり、鐘の声に誘発され、山を看るべく、纔かに簾を上げる程度の動作を表現したものと思われる。先ず、外界の寒気を防ぐ必要があり、また、見慣れた雪の山は、一瞥すればそれで充分足りたであろうし、また、牀にあって、起るに慵い気持に附随する動作の表現としても、例えば、

藜杖侵寒露。蓬門啓曙煙。力稀経樹歇。老困撥書眠（杜甫 11737）

等の、「撥」の用例をも考慮に入れれば、(3) この場合、「巻」ではなく、「撥」を使用することが最も適切であると思われる。

そこで、次項に於て、白氏が用いた「撥簾」の傍証のために、白氏文集、並びに、唐詩の中の用語例について検討しよう。

註（1）参考のため、連作五首のうち、第一・二・三・五を、こ　　（2）五架三間新草堂。石墻桂柱竹編牆。南簷納日冬天

こに掲げる。　　暖。北戸迎風夏月涼。灑砌飛泉纔有点。払窻斜竹

不レ成レ行。来レ春更葺東レ廂屋。紙閣蘆簾著二孟光一。

㈡喜二入レ山レ林初息レ影。厭二趨レ朝レ市久労レ生。早レ年薄レ有二煙霞志一。歳レ晩深諳二世俗情一。已許二虎レ溪雲一裏臥一。不レ争二竜尾道前行一。従レ茲耳レ界応二清浄一。免レ見二啾啾毀誉声一

㈢長レ松樹下小レ谿頭。斑レ鹿胎布白レ布裘。薬圃茶園爲二産業一。野麋林鶴是交レ遊。雲生二澗レ戸一衣裳潤。嵐隠二山厨一火独幽。最愛一泉新引得。清レ冷屈レ曲遶レ階流

㈤宦レ途自レ此心長別。世事従レ今口不レ言。豈止形骸同二土木一。兼将二寿夭一任二乾レ坤一。胸レ中壮レ気猶須レ遣。身レ外浮レ栄何足レ論。還有二一レ条遺レ恨事一。高レ家門レ館未レ酬レ恩

(2)「草堂記」は草堂の屋舎完成後間もなく書かれたものであり、まだ、山居の期間は永くはない筈である。ところが、記述の中には、香鑪峯の四季の美が夫々挙げられている。従って、この美観は、屋内の、或いは草堂を根拠地としての鑑賞とは、必ずしもいえない。

白氏は草堂創建以前にも屢々香鑪峯周辺に行遊しているので、この辺一帯は熟知していた。恐らくは、その時の経験をふまえて書かれたものであろう。

こういう見方からすれば、第四首の第三句「遺愛寺鐘欹枕聴」の鐘の音についても、第一句「日高睡足…」と時間上やや矛盾する如く思われ、この詩作時に於ける直接的経験というよりも、廬山周辺の、従来の全経験の中より、詩的必要から、つまり、「撥簾」して香鑪峯の雪をみる動作への契機として、「鐘」の句が必要であったものと思われる。

(3) 杜甫には、この外にも「撥悶」(題名)(11428)や「已撥形骸累」(長吟 11906)等の例があり、三例とも「スツ」という訓が適当と思われる。また、前掲、李白の「悔虚名撥向身之外」(悲歌行)にも、同様の語感を認め得よう。

(2)

先ず、白氏文集(詩篇に限る)に使用された、「簾」を上下、或は斜に動かすような、動作に関する用例、及び、「撥」のその他の用例について検討する。

一「簾」に係わる用例について　唐以前にも無論多くみられるが、全唐詩をみても、「簾」が詩的表現の素材として使用される例は

極めて多い。いま、白氏文集のうち、簾を払って白鳥起つとか、簾を透して花を観るというような例は総て省略し、差当り、この個所に該当する必要なもののみを挙げれば、次のようになる。

(イ)「巻」「捲」　簾を巻上げる動作を示す最も普通の例であり、「巻」が十二ヶ所〔うち、一例に「簾高巻」(0829) とある〕、「捲」が一ヶ所で、他の用例に比して、数も最も多い。

この字が使用される場合、その詩篇に含まれる気候的環境を、個々について検討すると、早春に始まり、初夏、夏、秋の季節の何れかに該当し、簾を巻上げることを避けねばならない程の厳冬に当るものは、一例も見当らない。全唐詩には、内容的にこれに応ずるごとく、「垂簾却避寒」(韋応物 08917) や、「褰簾雪未乾薄」(王建 15672) の例がみられる。

ただ、巻五十三「閑臥 2329」には「望レ春春未レ到」とあるが、これとて「簾巻(マイテス)侵レ牀(ツ)日(アリ)」とあって、室内に陽光を入れる為に簾が巻上げられていて、一篇中、何処にも寒気に関する言葉は見当らない。また、巻五十一「別二氈帳火爐 2243」では、「毳-簾逐(ハテ)レ日巻(マキ)。香-燎随(ハテ)レ灰滅(ニス)」とあり、その前に「遽変(ニス)二陽和節(ノ)一」ともあって、気温の変化と、「巻簾」が相併行している事が明示されている。

また「巻簾」が使用されている詩は、全体として、何れも比較的明るい内容をもち、前記、首題の香鑪峯下の詩の内容とは、稍〻趣を異にしている。

尚、「高巻幕」(巻五二・和寄問劉白 2259) という例があり、「幕」ではあるが、これも寒気とは無関係である。

(ロ)「褰」　これは九例あり、〔うち、一例に「高褰簾」(2412) とある〕「巻」に次でその数は多い。「褰」は説文に「褰、袴也」とある。「褰裳涉溱」(詩鄭風)「暑毋褰裳」(礼曲礼) とあり、「掲」と同義に用いられた。後に触れる如く、唐時代には「褰簾」の用例は多くみられる。観智院本名義抄には「ハカマ」の外に、「カヽグ・アカル・カキル」等がみえる。尚、「簾毎(ニテ)当(ニキ)レ山巻。帷多待(ハクテ)レ月褰(ヂク)」(巻十九・新昌新居書レ事 1259) の例からすれば、「簾」には、「巻」の方がより適切であるとみられようか。「褰簾」の外に、「褰裳」が四例、「褰帷」が一例みられる。

「褰」を気温との関連からみれば、略〻前項と同様である。一例 (巻二〇・郡楼夜宴留客 1330) は「褰簾」とありながら、「寒-天特(トニ)

未レ暁」とあるが、これとても、客と共に「褰レ簾待ニ月出一。把レ火看レ潮来一」のであって、寒気を怕れてはいない。また、「春夜喜レ雪」（巻一四・0756）で「明宜ニ滅レ燭後一。浄愛ニ褰レ簾時一」とあるのも、寧ろ春雪を喜び、ここでも寒気には全く触れられてはいない。

ただ、ついでながら、

新年多ニ暇一日一。晏一起褰レ簾坐。睡一足心更慵。日一高頭未レ裹（巻八・郡斉暇日 0362）

をみれば、慵い気持の動作的表現として、「撥簾」の「撥」と、略〻同様の心的状態の時に「褰」も使用されている。こういう例からすれば、外界の寒気を怕れる気持を除けば、二つの言葉の用いられ方を、それ程峻別して考える必要もなさそうである。

(ハ)「掲」その他　(イ)(ロ)を除けば、他は何れも用例は少ない。

「掲」　「閑一多掲レ簾入。酔一便擁レ袍眠」（巻六四・青氈帳二十韻 3096）の一例がある。

「開」　「開レ簾望ニ天色一。黄一雲暗如レ土」（巻五・効陶潛体詩十六首ノ二・0214）の例があり、これとは逆の場合が、「合」であり、「迎レ寒簾幕合」（巻五十二・葺池上旧亭 2285）がある。夫々一例である。

簾を上方に上げる動作の逆の場合に、「下」が八例あり、「垂」が一例認められる。

十「撥」の用例について　説文は「治也」。礼記曲礼に「衣毋レ撥足毋レ蹶」とあり、注に「発揚貌」とある。また文選（巻三五・七命八首）に「口齩ニ霜刃一足撥ニ飛鋒一」とあり、九条家旧蔵本には「除也」と傍注を施す。

白氏文集には、「撥」に関して、「撥簾」の外にも、多くの用例がみられる。いま、「撥乱」等、「治」の意に解せられる二例（「撥乱」0125・「撥世乱」1416）、及び、琴の撥等用具としての使用例を除けば、次のようになる。

(1)未レ撥ニ落レ盃花一。低衝ニ払レ面柳一（巻八・泛春池 0391）

(2)転レ軸撥レ絃三二両一声（巻一二・琵琶引 0603）（外に、「絃清撥利」1302・「胡琴錚摐指撥利」2200・「撥撥絃絃」2645 がある）

(3)撐ニ撥一詩人興一。勾ニ牽酒一客歓一（巻一五・題廬秘書夏日新栽竹二十韻 0808）

(4)披レ雲撥レ水環レ山繞レ野（巻二二・朱藤謡 1430）

(5)腕軟撥レ頭軽（巻五四・聴琵琶妓弾略略 2505）

(6)叱二撥駒一（巻六四・同諸客嘲雪中馬上妓 3105）

(7)棹遣二禿一頭奴子撥一（巻六六・池上逐凉ノ二 3265）

(8)閑撥二船行一尋二旧池一（巻六八・感旧石上字 3429）

この外に、

(9)游魚撥一撥蓮田一田（巻三・昆明春水満 0137）（那波本作鰒鰒、神田本等に拠り改む）

(10)網初鱗撥一刺（巻一七・自江州司馬授忠州刺史 1089）

の二例がある。

作品数の多いことにも起因しようが、白氏文集には、以上の如く、「撥」の用例は他に比して、際立って、多きを数える。

以上の用例から、先ず、「撥簾」は、白氏文集の中で、首題の詩一ヶ所のみに使用されていることが知られる。これらの用例全体をみると、「撥」は夫々、意味を異にするけれども、(1)(4)(6)等は、何れも、極めて動的で、動きが比較的早いか、弾力に富む点が認められる。ただ、総てがそうであるわけではなく、(3)(5)などは、特別、弾力的とはいえない。動作が明瞭な形では示されないので、後に説く如く、「撥簾」に対して、わが国では、適切な訓を施すことは、必ずしも容易ではなかったと思われる。

「簾」に関する、また、「撥」についての白氏文集の用例は以上であるが、用例の範囲を更に拡げて、全唐詩をも検討する。尚、「撥簾」については、『佩文韻府』にも、白詩以外の用例は記載されていないが、「撥」について、白詩に挙げられた用例以外で、注意を要するものの有無をみておく必要があろう。

先ず、白氏に最も近い元稹の『元氏長慶集』をみると、「簾」に関しては、「高捲」（巻二二・21568）、「開」（巻五・21006）、「払」（巻六・21026　巻七・21073　巻一五・21266）の如く、白氏文集にもみられる例の外に、

莫遣擁簾傷思婦。且将盈尺慰農夫（巻二二・酬楽天雪中見寄 21563）

鞘促節頻催。漸繁撥珠幢。斗絶金鈴掉。千軫鳴鏑発（巻二四・五絃弾 21600）

の例がある。後者の「撥」は白詩用例中の(5)と略〻同じく、上への動作を示し、「アグ」等の訓が適当であろう。「撥」については、この一例以外には、特に挙ぐべき例は認められない。

次に唐代の用例集という意味から、『全唐詩』をみると、「簾」に係わる語については、当然のことながら、「巻」「捲」の使用例が際立って多い。「褰」は予想外に少なく、その代りに「開」が比較的多い。その他、少数ながら、「上」「翳」「懸」等がある。「簾」を下す場合は、「下」「垂」が共に多い。

これらのうち、「巻」「捲」をはじめ、「簾」を上方に上げる語が使用されている詩篇を総て検討したが、白氏文集の場合と同じく、厳寒の頃のものは見当らない。雪に関係する比較的稀な例に於ても、

五更初起覚風寒。香炷燒来夜已残。欲巻珠簾驚雪満。自将紅燭上楼看（王涯・宮詞三十首ノ三 18218）

では、雪寒のため、結局、「巻簾」はなされないし、

窗窗深夜雪初晴。楼上雲開月漸明（中略）広庭積素偏相映。珠簾巻却光更深（権徳輿・旅館雪晴 17344）

も、寒気よりは、積雪の美に焦点が合されている。

次に、全唐詩に使用されている「撥」の例は、無論、少くはないが、先に挙げた、元白両氏の用例を補うものの中、[1]「主人若也勤挑撥」（南唐先主李昪 00310）の「撥」は、訓を施すならば、「アグ」が適当と思われる数少い例である。

以上、白氏文集、元氏長慶集をはじめ、全唐詩の用例からみて、管見では、「撥簾」は香鑪峯下の詩以外には見出し得ず、白氏の造語と見做して、略〻間違いないものと思われる。

これは、白氏より少し後になるが、

新創仙亭覆石壇。雕梁峻宇入雲端。嶺北嘯猨高枕聴。湖南山色捲簾看（沈亜之・題侯仙亭 26099）

は、恐らく、香鑪峯下の白詩をふまえて作られたと思われ、これは、当然、「捲」が使用されて然るべき情況であり、ここに「撥」を

充てることは出来ない。

とすれば、「撥簾」の語は、山雪、寒気、閑寂、幽独、慵情などと、特殊な条件が揃った環境下にあって、しかも、白氏によって、初めてなし得たものといえよう。(2)

註 (1)「撥」の用例について、先に挙げた元白両氏の例を補足するもの若干を示す。

「河畔垂楊撥不開」(宋之問 03226) 「悔虚名撥向身之外」(李白 08099) 「終然振撥損」(杜甫 10745) 「逋撥刺月銜」(顧況 13618) 「毬場慢撥幾人随」(楊巨源 17691) 「紅撥一声颺軽毬」(皇甫松 19465) 「自顧撥不転」(盧仝 20569) 「銜花金鳳当承撥」(李紳 25589)

(2) 全唐詩第十二函第十冊には、当代の「詞」が収められ、文学的素材として、「簾」を含む作が極めて多く、寧ろ、頻出するといえる。一方、詩作についてみると、李商隠、李賀等に「簾」の使用は率では極めて多く、韓愈、柳宗元、劉禹錫等では逆に、極めて少ない。白氏も無論、前者の、多い中に入る。この事は、各人の詩作の内容そのものと無関係ではないと思われる。

また、「撥」も「池魚撥撥」の如く、擬音的に使用される例もあり、これは俗的表現に近い。全唐詩「諺謎」「謡」類の中にも、「擦撥」「紅撥一声」「得撥」「軽撥」「痛撥」等の例が多くみられる。とすれば、一貫して、平易な表現を愛した白氏の文集にのみ「撥簾」の一例がみられることは、意味深いことといえよう。

尚、その後、『玉台新詠』巻五に、「清夜未三云疲一。細簾聊可レ発。玲玲玉潭水。映見蛾眉月(下略)」(和繆朗視月)を見出した。「撥」とこの「発」とでは、若干意味するところが異るかにみえるが、一応挙げる。

三 (1)

周知の如く、白氏文集は平安朝以来わが国では盛行し、多方面に影響を与えた。明治以後、優れた研究も少くはない。ただ、白詩受容についていえば、原詩とその訓に即した精密な研究は余りみられず、例えば、当面の問題として取上げた、「撥簾」の「撥」が、わが国で如何に読まれたかという、一見、周知と思われることですら、基礎的検討を経た上で、確定的になっているわけではない。

いま、ここでは、この問題を邦人漢詩文集と、白詩訓点・仮名文の二面から考察し、この項では、先ず、前者について述べる。

わが国漢文学史に於ける白詩受容については、何れ稿を改めて述べようと思うが、当時の文人の詩文集の多くは佚逸し、或は残巻が伝えられている程度で、しかも、現存鈔本も殆んどが江戸以後に限られる。これら一部分に限られた資料から全体を観ることは、多くの困難を伴うのである。こういう事情を考慮に入れても、猶、菅原道真や都良香の時代が、白詩受容史の上で一頂点をなすことは、恐らく、異論は無いであろう。この事は、例えば、既に先人が引いた如く、(1) 都良香の「集七十巻。盡是黄金」で結ばれる「白楽天讃」(『都氏文集』巻三)の、簡潔の言葉の中に、よく白氏の全貌を表現し得て妙である点などからみても知られるのである。

前述の如く、白氏が唯一度使用し、その後、唐詩から永く姿を消した「撥簾」という表現が、道真の注目するところとなった。その詩眼の高さと確かさとが偲ばれる。『菅家文草』には、この語が実に四度に亘り使用され、また、「撥」のみについては、多くの用例もみられる。いま、「撥簾」の用例について検討する。

「山陰亭冬夜待レ月」(巻一)　先ず全文を挙げる(岩波大系本により、訓点は若干改めた。以下同じ)。

高斉待レ月々何淹。不レ畏二風霜一幾撥レ簾。海伯応レ慵レ投二老蚌一。山神欲レ惜レ放二寒蟾一。
消二残砌一雪心猶誤。挑二尽窓一燈眼更嫌。珍重東頭光数尺。如レ无如レ有独纖々

第二句を、大系本「畏りず　風霜の幾たびか簾を撥ふことを」と訓み、且つ、頭注に「この言表の背後に、当時詩人無用論などが横行した社会風潮のきびしさが菅家廊下に及んだことをも諷している。」とある。筆者は共にとらない。「風霜」が主格ではなく、「撥簾」の主体は道真自身である。

この詩は、明かに前述、香鑪峯下の詩をふまえている。そして、「不レ畏二風霜一幾撥レ簾」の「不畏風霜」は、白詩の「不レ怕レ寒」に対応する。筆者前述の「巻簾」は、外界の寒気の際にはこれを避けることを、道真は充分承知しており、従って、白氏が、「巻」を用いずに、殊更、「撥」を使用したことも充分理解した上で、この語を受け容れたものと思われる。その意味で、まことに正確である。但し、白詩の詩情からみて、「撥」に「慵」の語感をも含めているとすれば、「幾」は如何であろうか。

この詩の中には、外にも、「応慵投老蚌」の傍点字は、白詩の「猶慵起」に、また、「砌雪」は同じく「夏月涼灑砌」（香鑪峯下詩ノ一）に、或いは、対応していると云い得よう。

「書斉雨日独対梅花」（巻一）　前半を略して挙げれば、

紙障猶卑依レ樹立。蘆簾暫撥引レ香廻。書斉対レ雨閑無レ事。兵部侍郎興猶催

とある。香鑪峯下の詩ノ一の「紙閣」「蘆簾」に、この詩の「紙障」「蘆簾」は、夫々、対応するとみてよかろう。

これは梅の季節であり、特に寒気を怕れることはない。外は雨であり、梅の香りが部屋に入る為ならば、簾は少し上げるだけでよい。従って、この場合、「簾」を「巻」き上げるのは相応しくない。その意味で、この「撥」は白詩の詩情に合致しているといえる。

「早春侍二宴仁寿殿一同賦二春暖一応レ製并序」（巻二）　ここでは、詩の中にではなく、その序文の中で使用されている。首よりその一節を引けば、

春之為レ気也、霏々焉。漢々焉。鶯瓦雪銷、見二天下之皆就レ暖。鳳池氷治、知二天下之不レ受レ寒。時也翠幌高開、珠簾競撥。留二万機於一日一、翫二三春於二旬一（下略）

とある。春風陽和の候であり、寒気の怕れはなく、陰雨もない。「鶯瓦雪銷」は、長恨歌の「鴛鴦瓦冷霜華重」に対応はするが、無論、春の装いに改められている。尚、序に続く詩中の「語鳥千般皆徳煦。遊魚万里恩波」は、白氏文集巻三（新楽府）の「亀尾曳レ塗魚煦レ泡。詔開二分水一注二恩波一」に対応する。「煦」をわが古鈔本は「アキトフ」と訓み、霊池が干上り、魚が纔かに残る泡を呼吸するという意味であるが、道真はこれをふまえて、「徳煦」と、巧に頌辞に転化させている。(2)

序に戻るが、翠幌の「高開」に対し、珠簾の「競撥」の「撥」は、白詩の例に徴すれば、必ずしも適当とは思われない。寧ろ、前に挙げた元稹の「漸繁撥珠幢」の「撥」に近いとみられよう。

「簾」を上げる動作に関する用例としては、外に、「御簾巻却月鈎新」（巻四 324）の一例があり、また「簾」についてではないが、「翠幕晩来褰」（後草 482）の例もあり、この「巻」、或いは「褰」の方が適当ではなかろうか。文草には、簾関係の四例以外にも、

「疑雷撥二夏雲一」（巻五 415）「撥二蘭亭一」（巻六 456）の例があり、道真はこの「撥」に、かなり関心を示していたものと思われる。

「晨起望山」（巻四）　七言絶句である。これを挙げる。

不レ寐三通レ宵二直到レ明。蘆レ簾手撥、対三山レ晴一。避レ人猨レ鳥松レ蘿裏。唯有二飛レ泉雨レ後声一

雨後である。無論、寒気はない。とはいえ、独居、静閑、慵情の点では、白氏香鑪峯山居の詩と同類ともいえるし、白詩をふまえていることは明かであろう。その意味で、「撥」の使用は適切であるといえる。尚、「手撥」については、孟浩然に「手撥金翠花。心述玉紅草」（07622）や、崔珏に「手撥絲篁酔心起」（32698）等の用例がある。

『菅家文草』にみえる「撥簾」の例は以上である。仁寿殿応製詩序の場合は、稍々白詩と異なる用法の「撥」といえようが、その他の三例は、流石に原詩のニュアンスが巧にとらえられている。

道真のこの例を除けば、従来知られる平安末期迄のわが漢詩文集には他に見当らないが、更に追加すべき用例を一例挙げる。それは、既に、川口久雄氏により紹介された『中右記部類紙背王朝漢詩集』(3)（九条家旧蔵平安末鎌倉初間写）に収められている。

長治元年（1104）十一月十日　白雪満庭松十一首（巻五紙背詩一四）／七言冬日於因州員外刺史書亭同賦白雪満庭松詩（以案為一并序）〔本文は『図書寮叢刊』（平安鎌倉未刊詩集）に拠る〕　参加した十一人は、大江家国（史記延久五年点の加点者）、藤原敦基（文章博士）、平祐俊、藤原尹時、藤原宗兼（父ハ文章博士）、藤原敦光（文章博士）、（藤原）公明、藤原実光（文章博士）、藤原令明（文章博士）、藤原資光（大学頭）、藤原知明（後、茂明と改名）（文章博士）である。（　）内は、全部が詩作製当時の現職ではないが、何れも文道に携わる者の集りといえる。尚、附言すれば、敦基、敦光は兄弟であり、その父は明衡である。令明、茂明は兄弟であり、父は敦基である。宗兼の父敦宗、祖父実政は共に文章博士である。実光と資光とは兄弟である。

更に、これらの人の中、特に白氏文集との関係を記せば、大江家は代々文集の侍読の家柄である。敦光は当代切っての学者・文人であると共に、『本朝無題詩』等の詩には白詩の影響が濃くみられ、且つ白氏文集を所蔵していた事は、資料に徴して明かである。(4) 知明は神田喜一郎氏蔵白氏文集巻三・四（新楽府）天永四年（1113）点の加点者として知られている。祐俊は、歌人として著名な平兼盛や、赤染衛門の一統であり、同族に歌人が多い。敦光と同じく、白氏文集を所蔵していた事は資料に明かである。(5)

十一首のうち、当面、必要な三首を挙げる。

紛々白雪撥簾看。（散位藤原宗兼）剩満庭松望裏寛。光風（ママ）標簷下乱。色埋雨蓋砌前寒

窓梅交朶花俱綻。籬竹湿陰煙不乾。毎属玄冬雖照読。無成独取労心肝

終朝翫雪土盤桓。（大内記敦光）旁満庭松興未闌。百尺月斜排戸望。数株花重巻簾看

門賓仮蓋衣還湿。沙鶴馴枝翅共寒。歳々対来論勁節。大夫樹与記言官

庭上移栽松樹攢。（文章得業生令明）満来白雪自団々。低枝欲掃玉度積。高蓋不遮沙月寒

華髪衰翁携杖立。粉顔佳妓倚簾看。久伝累葉家門業。聚汝年々其幾般

ここで、計らずも「―簾看」が三人により採られたが、「寒」韻という制約があれば、当然起り得ることであり、この三人以外でも、他の二人が「看」を韻字に用い、他の三人は韻字としてではないが、句末に用いている。しかも雪が題材ともなれば、この顔触れならば、「撥簾看」を含む白詩が想起されるのはごく自然であろう。

三首のうち、宗兼作の「撥簾看」は、白詩をそのまま取るが、この外にも、「簷下」は白詩「南簷」と、「砌前」は白詩「灑砌」（共に五首ノ一）に対応し、更に、「窓梅交朶花俱綻。籬竹湿陰煙不乾」は白詩「野麋林鶴是交遊。雲生澗戸潤衣裳」（五首ノ三）に対応するとみられよう。「簾」についてみれば、「紛々白雪」に対して、「巻」は用いられず、当然、「撥」にすべき場合である。

敦光の作も、白詩をふまえていることは明かであり、「門賓仮蓋衣還湿。沙鶴馴枝翅共寒」は、宗兼と同じく、「野麋…」の一聯に対応する。ただ、雪とはいえ、宗兼の作とは稍々異り、「撥」にする必要はない。敦光が、当然、白詩を意識しつつも、「撥」を使用せずに「巻」に改めたのは、「撥」の意味を充分に理解した上でのことは云う迄もあるまい。

令明の作は、元来、白詩と発想を異にするので、ここでは触れない。「―簾看」と続く用例は、唐詩には稀ではない。

以上、道真と、平安末期の第一級の文人の作からすれば、「撥簾」と「巻簾」とは明確に区別されていたことが知られる。ただ、管見では、中国のみならず、わが国でも、「撥簾」の用例は稀であり、これ迄のところ、以上挙げた五例に止まる。

次に、平安朝漢詩文に於ける、これらの語の使用に関する一般的傾向を知る為に、現存漢詩集（新校羣書類従第六文筆部所収分）をみれば、「簾」に係わる語としては、『菅家文草』の場合と同じく、「巻」「捲」が最も多く、「褰」がこれに次ぎ、「開」「上」が各一例宛認められる。外に、『本朝文粋』には「漸挑簾帷」（巻一）の一例がある。

「撥簾」という表現ではないが、「簾」の上げ方を、単に「巻」や「褰」のみに止めずに、修飾辞「半」「閑」を加えて、「撥」に幾分近づけた例が認められる。（唐代の詞には「慵巻」の例が数例認められるが、わが国には流石にこの例は無い）。そういう一例として、藤原周光「秋日言レ志」（本朝無題詩巻第五）の一節に、

十歩芝蘭如レ入レ室。三間芦葦半褰レ簾。一觴一詠興無レ尽。遮莫今宵鐘漏淹

とあるのは、白氏香鑪峯下詩をふまえたものとみるべく、「三間」は同詩ノ一の「五架三間」に対応すべく、「半褰簾」は同詩ノ四「撥簾」に対応すべきものとみられよう。とすれば「半褰」は、表現を変えてはいるが、「撥」に対する作者の解釈の表われとも見做されよう。これと同じく、藤原季綱「月火言レ志」（本朝無題詩）の一節の、

清霜弥淬開レ奩劒。白雪自調在レ座琴。胡管秋声遙遣レ思。南楼暁望幾傷レ心。

閑褰二簾箔一有二余興一。何必剡渓足二遠尋一

に用いられる「閑褰」は、詩情からすれば、「撥」に替え得る個所と思われ、作者が意識的であったか否かは、無論明かではないか、自から「撥」に近い表現になったといえようか。

『本朝無題詩』には歴代漢詩文中（白詩受容以後）、白詩の影響が最も顕著にみられる。白氏がいう「詩魔」という言葉が屢々ここにも引かれ、(6) 或は、「新楽府」の詩句が数多く採られ、無論、それは、白氏文集の他の巻にも及んでいる。その白詩よりの投影個所は、枚挙に暇がない程である。それにも増して、

緑樹陰前徐避レ暑。閑披二白氏古詩一吟（巻五・藤原茂明）

白氏古詞詠二紫藤一（白氏文集慈恩寺三月三十日詩云。紫藤花下漸黄昏）（巻九・藤原明衡）

白詩六義専吟詠。玄理一圓聞二論談一（巻五・菅原時登）

と、当代有数の文人達が、これ程、直接的な表現で、白詩に言及しているし、或いは、

白氏昔詞尋レ寺識。紫藤晩艶与池巡（巻九・惟宗孝言）

白楽天詩披レ月験白氏文集有老住香山初到夜。秋逢白月正圓時之句。故云（巻九・藤原基俊）

などは、白詩を作詩の規準とするなど、何れも、白氏文集への傾倒を如実に示して余蘊がない。

この中に交って、

客路誰通浦レ雪暁。老情難レ慰待レ春時。独斟二玉盞青田酒一。閑詠二香鑪白氏詩一（巻二・菅原在良）

籬暖草抽新縷色。渓寒鳥祕破袍声。遣レ懐外土鑪峰昔。詩主楽天老任情（巻一〇・釈蓮禅）

と、香鑪峯下の詩も屢々みられる。この中で、源経信の作である、

地卜勝形向二碧湍一。一朝趂到叶二幽閑一。石階苔滑灑二春水一。柴戸門深入二暮山一。

欹レ枕空望郊野路。言レ詩暫忘毀誉間。淹二留此処一多二情感一。感及二黄昏一未レ及レ還（巻六）

は明かに、白氏香鑪峯下詩を意識に入れ、「石階苔」は白詩の「石階」（一首）に、「灑春水」は、同じく「夏月涼灑砌」（一首）に、「欹枕空望」は、同じく「欹枕聴」（四首）に、「暫忘毀誉間」は、同じく「免見啾啾毀誉声」（二首）に対応する。ただ、この詩には、「香鑪峯雪撥簾看」よりの投影個所は見当らない。

この事は、香鑪峯山下の白詩が、単に、断章された「欹枕聴」や「撥簾看」という句に対する愛好に止まるものではなく、寧ろ、この詩全体に、つまり、その文学的表現と、そこに示されている白氏の、山居という生き方にこそ、文人達の関心が寄せられていたことを明かに示している。断章され、佳句の蒐められた『和漢朗詠集』をみても、香鑪峯下の詩は、「宦途自レ此心長別。世事従レ今口不レ言」（第五）も収められ、外に、「廬山草堂夜雨独宿…」（巻十七）や、巻十六・十七の江州時代の作は十八首も採られている。

この期の白詩への傾倒は、ただ漢詩文のみに止まらず、和文にも明かに反映しており、例えば『源氏物語』をみれば、「撥簾」を含

む一聯をふまえた表現がみえるのみでなく、江州時代の詩をふまえた個所も、数ヶ所認められ、(7) 文人達の白氏の生き方に対する関心が、そのまま受け容れられている。光源氏須磨流謫に際し、その携行書籍に白氏文集を挙げたのは、白氏、江州遷謫の悲嘆をふまえて、卓抜の手法といえよう。和文にみられる漢籍の引用は、女流による、佳句の独自の蒐集によるものではない。謂わば、文人等の詩嚢の一端が、或いは、女房文学の中に、また、宮廷場裡に、華やかに紹介されたに過ぎないのである。学問の衰微に比例して、朗詠集が重んぜられるようになる。確かにそれは佳句の精粋ではあるが、その底辺に、永年に亘る蓄積の存することを知る必要があろう。

その佳句を繞って、宮廷に於て、女流のみでなく、文人達も加わって一種の知的遊戯が展開されるが、これは飽迄も余技であり、遊戯であって、そこにみられる佳句の扱われ方のみを以て、彼等の、漢籍に対する受容や理解の程度を云々することは、厳に慎まねばならない。文人達の漢学の素養に関しては、先ず、その漢詩文の検討が先である。

註

(1) 金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集』(第一冊)を参照。

(2) 「煦」を、大系本、「みな徳の煦(あたたか)なり」と訓むは、意明かならず。文集巻三神田本は「アキトフ　イキック」の両訓を施す。ここでは、原詩の主格魚が鳥に替っているので、「アキトフ」は不適であるが、「イキック」はそのまま、生かされる。白氏文集万治版本は「イキック　アッシ　アギトフ」とあり、俗字(仏中三〇)には「イキック　アッカ　ヤク　アキトフ」とある。

(3) 川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』(下)

(4)(5) 尊経閣文庫蔵白氏文集那波古活字本への、古鈔本よりの転写本奥書によれば、その巻五九—六八までの若干の巻に、大治四年(1129)より天承元年(1131)にかけて、式部大輔藤原敦光の本より息邦光が移点した本奥書がある。巻五十九尾題前には「本云大治四年四月中以式部大輔之本進士邦光点之也云々」とある。また、同じく尊経閣本の巻一一—五七までの若干の巻には、保安元年(1120)より大治二年(1127)にかけて、藤原宗重(『中右記』の撰者宗忠息)が平祐俊の証本より移点した旨を記す本奥書がある。巻十一尾題次余白には「保安五年初二月中旬以平祐俊之証本自以移点了(下略)　藤宗重」とある。詳細は、拙稿「内閣文庫所蔵管見抄と「越抄」について」(「金沢文庫研究」一八—一一)参照。

(6) この言葉は、既に、菅原道真も使用している。例えば、『菅家文草』巻四「秋雨」に、「閑境併詩魔」とある。

(7)『源氏物語』に引かれた白氏文集の巻次による分布の概略をみれば、巻二秦中吟、巻三・四新楽府、巻十二長恨歌伝・長恨歌が多く引かれることは、よく知られている。これに次いで多いのが、巻十六・十七であり、この両巻には江州時代の詩作が収められている。また、巻二十六の江州山居の記である「草堂記」も数回引かれる。巻十六・十七所収の詩からは、香鑪峯下の詩が引かれるのみならず、「庾楼暁望」(0961)や「官舎閑題」(0920)や「薔薇正開」(1055)等は、何れも流謫の窮態を詠じたものである。とすれば、江州時代の白詩は、かなりの比重を以て、採り容れられたことになる。

(2)

次に、「撥簾」に対する平安時代以来の訓、及び、和文について検討を加える。

香鑪峯山下の詩は、前述の如く、白氏文集巻十六に収められている。この巻の平安時代鈔本は現存せず、また、鎌倉時代の鈔本ではあるが、本文としては、日中両国を通じ、現存本中最も信用の置ける金沢文庫旧蔵本もこの巻を欠き、これに代る、然るべき鎌倉時代の鈔本も未だ見当らない。

この外に、白氏文集より、適宜、詩文を抄出した所謂選抄本があり、そのうち、『文集抄』(平安中期写酒井宇吉氏蔵)や、『管見抄』〔正元元年(1259)成立、永仁三年写内閣文庫蔵〕には、共に、この詩が収められるが、訓点は後者のみに施されている。

定家自筆の『(源氏物語)奥入』には、引用白氏文集に、その総てにではないが、詳細な訓点が施されていて、貴重である。但し、総角の巻の注に、この詩は引かれるが、訓点は施されていない。

『千載佳句』『和漢朗詠集』には、共にこの詩は収められている。前者に、訓点の施された鎌倉時代鈔本が現存するが、未見である。その転写本と覚しき内閣文庫蔵本〔本奥書には正安二年(1300)の年号がみえる〕には、ヲコト点・訓点を施すが、この句には無い。朗詠集平安時代鈔本(断簡)には、訓点の施された本も現存するが、全巻に亘り、訓点の施されたものは極めて稀である。鎌倉時代以

後では、訓点の施されたものも、比較的多く現存する。とすれば、朗詠集の訓は、この検討には極めて有力な資料となり得る。

以上、基本的資料は多くはない。朗詠集の鎌倉・室町時代鈔本の訓点調査も未だ充分ではないが、いま、そこに施された訓を中心にして、「撥」について検討を加える。（その後、朗詠集訓について増補し、これを末尾に〔補〕として附した。）

「撥」につき、『篆隷萬象名義』に「撥補達反、治、絶、理、本、棄、除」とあり、このうち、白詩への適用範囲には「除」が存する。観智院本名義抄には「上鉢ヲサム　ハラフ　スツ　ノソク　カヽク　「ハル　オコリ　オサフ　ヒラク　ハシク　マネク　アバク　シツム　ヤフル（タフル）」がみえ、傍線を施したものが、一応、ここで採りうる可能性のある範囲内のものである。

前記訓点資料で、この名義抄に所載されているのは、「カヽク」である。外に、貞享元年・天明二年等の刊本にみえる「ハラッテ」がある。前記資料では、この他に、「マキアク」「マイテ」「アク」「ツイハテ」「ヲシハテ」等がみられる。また、和文の中で、「簾」に係わる語としては、「まきあげて」「あげ」「ひきあけて」「かかげて」「おしはて」等がみられる。

以下、個々の語について述べる（訓点の施された朗詠集の調査終了の段階で、論旨改変の要があれば、更めて、補訂を加える）。

（諸本の略称は次の通り）〔管見抄〕…内閣文庫蔵清原教隆加点永仁三年写本（1295）（以下、朗詠集）〔東急本〕…大東急記念文庫蔵南北朝写本〔東急菅本〕…同嘉暦元年写本（1326）（奥に永正四年菅原和長の手跋あり）〔尊経閣寂本〕…尊経閣文庫蔵伝釈寂然筆本二帖〔尊経閣二条本〕…尊経閣文庫蔵嘉禎四年二条為氏筆以菅原為長自筆本移点本二軸（1238）〔静嘉堂本〕…静嘉堂文庫蔵伝後宇多天皇宸筆本二帖〔山田本〕…故山田孝雄氏蔵文安四年写二冊（1447）〔教順本〕…高野辰之氏旧蔵室町末写本二冊〔寛正本〕…高野辰之氏旧蔵南北朝写本二冊（特120—2）〔内閣本〕…内閣文庫蔵〔室町末〕写本二冊〔陵安貞本〕…宮内庁書陵部蔵江戸写安貞二年本奥書本二冊（1228）〔陵伏見本〕…同伏見宮家旧蔵寛欽法親王筆本一冊〔陵別本〕（503—1）…同室町写本二冊〔陵又本〕（503—167）…同蔵本二冊〔陵谷森本〕…同谷森善臣旧蔵天正八年水無瀬兼成写本一冊〔陵寛永刊本〕…同寛永十八年刊清家訓移点本二冊〔国会本〕…国立国会図書館蔵室町末写本二冊

「アク」　これは「マキアク」の「マキ」が表記されない訓とも解し得るが、別訓として扱う。内閣本はこの一訓を施し、〔補〕に示した通り、早大永禄本・同弘治本・東大残花本も、右傍、或は、右傍内側にこの訓を施す。外に、和漢朗詠集私注（平安末成立・室

町時代写本多数存す）には、概ねこの訓を施す。現存訓点本には、それ程多くはないが、和文に「簾をあぐ」の例は極めて多い。

「カ、ケテ」　管見抄本・東急本・尊経閣寂本・山田本・陵谷森本・陵寛永刊本の六本は、この訓のみを施し、東急菅本・陵伏見本は、右傍にこの訓を施し、左傍に別訓二種を加えてある。また、尊経閣二条本は右傍内側にこの訓を施し、外側、及び左傍に、夫々一訓づつを加えてある。更に、寛正本・陵安貞本は左傍にこの訓を施し、右傍に別訓を一つ、陵別本は、同じく右傍に別訓を二つ、夫々、加えてある。尚、国会本の「ケテ」の一訓は、「カ、ケテ」か。〔補〕に示した通り、この訓を右傍に施す本は極めて多い。つまり、〔補〕に示した(1)～(8)迄の「カ、ケテ」は、本文に早くから加えられたものと見做してよいであろう。尚、博士家の系統でいえば、管見抄本・陵寛永刊本は明かに清家点であり、両本とも、この一訓のみが施されている。また、東急菅本・尊経閣二条本は菅家点であり、また、〔補〕の正嘉本・天理貞和本にも、菅家点がみられる。とすれば、「カ、グ」「マキアグ」が菅家点か。

この訓の原形「カキアク」の「カク」は、元来は、「葦垣の末かきわけて」（万葉集 4101）や、「眼に髪のおほへるをかきはやらで」（枕草子・うつくしきもの）や、現代でも用いる「雪かき」等の用例からすれば、払いのけるように上げる意に解し得よう。とすれば、「撥」の訓としては、寔に適訳といえる。後には殆んど混同して用いられるようになるが、「巻きあぐ」とは同義に解すべきではないであろう。朗詠集の訓としては、〔補〕をも含めて、対象となった点本に関する限り、早くから定着していたにも拘らず、和文で「簾をかかぐ」という例は稀であり、(1) 或いは、次第に、より明瞭な「巻きあぐ」が常用されるようになったのかも知れない。

「マキアク」「マイテ」　教順本には「マヒテ」一訓が施される。陵安貞本が（この本の訓はすべて朱筆である）右傍に「／マイテ」左傍に「カ、ケテ」とある外は、東急菅本・陵伏見本は、右傍に「カ、ケ」、左傍の内に「マキアケ」、その外側に「ツイハテ」が施され、尊経閣二条本は右傍に「カ、ケテ」、その外側に「マキアケ」、左傍に「ツイハテ」があり、陵別本では、右傍内側に「ツイハテ」、その外側に「マイテ」、左傍に「カ、ケテ」が施されている。〔補〕の訓をも合せて、訓点の加え方からみれば、この訓は、「カ、ク」と共に、「撥」に対する最も基本的な二訓といえる。

前掲、中国の古辞書を承ける萬象名義や、名義抄にも、「マク」、或はそれに類似の意や訓は見当らず、また、既述の如く、「撥簾」

を用いて詩作した道真や、平安末期の一部文人達にも、「撥」と「巻」「捲」とは、明瞭に区別されていた。それにも拘らず、この訓が「カ、ク」と共に、屢々鈔本類に施されていることには、恐らく、それ相応の理由が存したに違いない。

更に、注意を要することは、本文上の問題である。既に述べた如く、香鑪峯下の詩中の「撥」は、日中両国に現存する白氏文集鈔本・刊本類は、共に、本文が総て一致している。それにも拘らず、御物伝行成自筆本及び近衛家蔵伝行成自筆本という、平安時代鈔本として、比較的良質の二本は、「撥」を「巻」に作る。これは、異本として検討する余地は少ないが、さりとて、誤写と断ずることは出来ない。そして、こういう本文をもつ本が、当時、成立していることは、その影響の可能性を考えれば、注目すべきであろう。「巻」に作る本文は、更に、外にも見出されるかも知れない。「マキアク」「マク」と、和文との関連については、後に触れる。

「ツイハテ」　〔補〕の蓬左文庫二条本は、右傍にこの訓を施し、静嘉堂本は右傍内側にこの訓を施し、外側に合点を附した「カ、ケテ」を加えてある。但し、この別訓は薄墨後筆であるので、元来は、「ツイハテ」の一訓であった。〔補〕の岩瀬延慶本は右傍内側に施し、寛正本・陵別本は右傍にこの訓、左傍に別訓「カ、ケテ」を加える。陵別本は右傍外側に「マイテ」をも加える。また、尊経閣二条本は左傍朱筆訓、陵伏見本は左傍外側の訓として施されている。

訓の施され方からすれば、この訓も古くからのものであろう。但し、古辞書類、及び、朗詠集以外の点本類や和文の何れにも、殆んどこの訓を見出すことは出来ない。「ツイ」は「ツク」とみられ、「ハテ」は促音の無表記と解せられる。「張」を充て得るとも考えられるが、この訓と類似の「ヲシハテ」も三例みえるので、関連させて考える必要がある。

「ヲシハテ」は、〔補〕の陽明文庫本、及び陵又本に、この一訓が施されている。古辞書には見当らないが、和文にはみえる。

簾高くおしはりて、五節の君とて、ざれたるわかうどのあると、雙六をぞうち給ふ（源氏物語・常夏）

取りわかつべくも侍らず。たゞこゝもとにて御覧ぜよと言へば、あらゝかに踏み出づ。簾を押し張りて、枝を見はり給ふをみれば（下略）（堤中納言物語・蟲めづる姫君）

前者では、体を押して簾を張り出す如くする動作を示し、はしたない様子を表わすとされる。後者も、略ゝ同様であり、姫君が簾中

より毛虫を仔細に観察しようとする有様を描いて適確である。但し、両例とも、簾は張り出されて、やゝ湾曲はしても、その裾は上ってはいないと解すべきであろう。

この例をふまえて、朗詠の訓を考えれば、更に一歩進めて、手をもって簾を斜前に張り出し、裾を床から上げて、香鑪峯を看るのでなければならない。とすれば、和文の両例、更に、「落ちぬべきまで簾はり出でて」（徒然草）をも含めて、和文の例とは意味上若干の距りができ、「ツイハテ」「ヲシハル」を、香鑪峯が見得る程に斜上に上げる意味で用い得るのか、稍ゝ疑問が残る。但し、簾が短いものと解すれば、意味は通じる。名義抄に「除ク゛ッ」「排ォス」の例があり、手懸りになろうか。何れにせよ、この両訓は「撥」翻訳上の苦心の現れと解すべく、同時に、「撥」が、元来は、「巻」「捲」等とは明かに区別されていた傍証にもなろう。

「ハラフ」　鈔本類には、〔補〕の分を含めて、一本も見当らないが、江戸の刊本類には散見する。文選の「口皷三霜一刃一。足撥三飛一鋒一」（巻三五・七命八首）（文選六臣注寛永刊本に「ハラフ」を施す）にみえる例等は、瞬時に早い動作を要し、「ハラフ」という訓は相応しいが、「簾」の場合は、それでは室内から外が見えず、また、この訓では、道真の「簾暫撥」という表現は不可能になる。

以上、朗詠集に施された訓を中心にして、「撥」に対する訓を検討した。その結果いえることは、訓としては「アク」が「撥」の動作の方向を示した点で正しく、「カ、ク」は、「撥」の意味をつかんで、最も正確であり、「マキアク」「マク」は、中国の字書、用例、及び名義抄にもみえず、いわば意訳の一種とみることが出来よう。これは、どちらが正確であるかという問題ではなく、訓読に於ける二つの異った態度とみるべきであろう。元来、「撥」そのものは、唐時代の用例からみれば、動作としては一定の明瞭な方向をもたず、早い動きを示す「ハラフ」「ハネル」が適当な例がある一方、上下、左右、何処へも動き、その時の文脈から判断されるような用例が多い。これを、「アグ」或は「カ、ク」と訓んだ場合、上への動作の方向を示した点では正確ではあるが、どの様に上げるかは不明のままである。それに明瞭な動作内容を附与したのが、「マク」及び「マキアク」であり、訓読に於ける一方向が示されている。但し、その結果、「巻」と「撥」との、原字のもつ区別は、翻訳としての訓読により、殆んど失われた。

訓読に於けるこれらの訓のうち、何れが早いかは、点本の現存状態よりみて、遽に決し難い。ただ、文字に即した訓と、意訳的な訓

とは、当然、共に必要であり、常に併行して施される。これは、例えば、白氏文集巻三・四新楽府の中、平安末期迄に到達した多くの訓を略〻網羅している神田本をみれば、一目了然である。(2) と同時に、当時の訓の実情を知るには、その一部に過ぎない現存鈔本の訓の施され方だけでなく、広く当時の資料、つまり、和文とも関連させて考えねばならない。鎌倉時代の鈔本には、前時代のものを継承しつつも、その時代の訓の特徴が表われ、平安時代の訓が総て伝存されるとは限らないからである。

源氏物語を始め、同類の当時の女房達による作品を検すると、前述の如く、「簾をかゝぐ」という用例は極めて稀であり、「あぐ」及び「まきあぐ」が一般的である。その中、いま、白詩の「撥」と関連があると思われる二例を挙げる（共に岩波大系本に拠る。以下同じ）。

簾をまき上げて見給へば、向ひの寺の鐘の声、枕をそばたてて、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて（源氏物語・総角）

三日になりぬる夜、降りける雪、三四寸許たまりて、今も降る。簾を巻きあげてながむれば、あなさむといふ声、こゝかしこに聞ゆ。風さへ速し。世の中、いとあはれなり。（蜻蛉日記・一四五）

源氏の例は、香鑪峯下の白詩をふまえていることは明瞭である。ここまで白詩との距りが少ないとすれば、作者は、白詩の本文を文集・朗詠等の何れに拠るにせよ、「マキアク」という訓の施された本に拠って、この詩を訓み、理解していたとみてよかろう。源氏の他の個所、つまり、別に漢詩を意識的にふまえていない、他の日常語には、「まき上ぐ」「上げ」「ひきあげ」等が併用されている。

後者、蜻蛉日記の文については、大系本校注者川口久雄氏は、前者源氏と同様の白詩をふまえているとされ、角川全注釈の著者柿本奨氏は、それを否定される。但し、『奥入』その他、古注釈家ならば否定はしなかろう。ただ、いまも雪が降り、風も速く、厳寒時に当って、唐詩では、態々「巻レ簾」のような用例は、例外を除き、皆無に近い。前章、藤原定兼の詩にも「紛々白雪撥簾看」とみえる通り、この時の情況からすれば、簾を上げるならば、原詩の立場からすれば、当然「撥」でなくてはならない。蜻蛉の作者が、そこまで考慮に入れたか否かは、無論、不明であるが、少くとも、この程度に「巻きあぐ」が広く用いられていたとみることが出来よう。

ここまできて、漸く、枕草子の一節が必要になってくる。

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、物語などして集りさぶらふに、少納言よ、香爐峯の雪いかならんと仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ。人々も、さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。なほ、この宮の人には、さべきなめりといふ。(二九九段)

とあり、この中に、「歌などにさへ歌へど」とあるので、「朗詠百首」(羣書類従巻一七五) から引けば、冬部に、

香爐峯雪撥簾看

こゝながら宿の簾を巻きあげてみるおもしろき山のすゑぶり

などの例がある。

枕草子の中、簾を上げる動作に関する例は、この例をも含め十二例ある。「ひきあげ」(129)「いささかひきあげ」(36) の二例、「うちあげ」(278) の一例、「もたげて」(137) の一例の外は、「いと高うあげ」(302)「たかうあげて」(35,193)「あげて」(240,224) 等、「上ぐ」が用例の基本である。

清少納言は、この場面では、無論演技として、恭々しい態度で、簾を高々と巻き上げることによって、中宮に奉答したのであろう。動作自体としては、簾を「高く上げ」ることと、高く巻き上げることとは全く同様の筈である。枕草子にみえる「あぐ」という用例を検討しても、すべて、「まき上ぐ」と些も相違はない。つまり、この両語を区別して用いたとは到底思われない。

また、枕草子を除いて、簾を「あぐ」という、他の用例(源氏物語・紫式部日記・浜松中納言物語等) を検討しても、訓点語として、「撥簾看」の個所に対する訓として、原詩の詩情に相応しい使われ方をしている「アグ」に近い例は全く見出されない。つまり、当時、少くとも和文に於ては、「あぐ」と「巻き上ぐ」とは、同義語として使用されていたといえよう。それ故、紫式部は白氏の原詩に対して「巻きあぐ」を用い、清少納言は「高く上ぐ」を用いてはいるが、原詩の理解の程度には、殆んど変りがないといえよう。

従て、若し清少納言が「マキアグ」という訓の施された文集か朗詠集に接していて、そう訓んでいて、それが彼女自身に固定していたとすれば (当時愛唱されていたこの句が、聴覚を通して固定することはごく自然である。)、紫式部と同じく、『枕草子』に於ても、

当然、「巻きあぐ」と表記したに違いない。とすれば、紫式部と清少納言の（当然、蜻蛉日記の作者も含めて）、「撥簾」に対する訓みは、唯、点本の系統を異にしていたというべきであろう。前述の如く、「アグ」と訓ずる朗詠点本は、少からず現存する。

近来、訓点の施された漢籍・仏典、謂わゆる訓点本の蒐集、調査、並びにその研究は急速に進展し、正に瞠目すべきものがある。ただ、この仕事に携わる人は多くは国語学者であり、その主たる目的は、訓点を国語史の重要な資料と見做しての蒐集・研究である。

無論、訓点本は、ただこの目的の為に供せられるのではない。訓読の跡を辿ることにより、中国思想や、中国文学のわが国に於ける受容を一層明瞭に跡づけることが出来る。訓点を施すということは、漢籍・仏典の翻訳であり、中国文化受容の最も基礎的資料といえる。訓点資料を翻訳資料であるという立場から、つまり、ある訓が原典の意味に如何に正確に迫ったか、或いは、原意とは遥か遠い訓が施されるようになった原因は何故か、というような、原典と対応させての検討が、訓点資料を使用してもっと活潑に行われることが望ましい。その為には、同時に、原典としての漢籍や仏典の意味が正確に解せられねばならない。(3)

また、女流文学等の和文には、多くの漢籍・仏典が引用され、或いは、それをふまえた表現がみられる。その出典研究の段階に止まることなく、その引用された個所の、和文に於ける扱われ方を通して、引用原典の理解のされ方も検討されねばならない。

つまり、引用された原典に対する訓を出来得る限り蒐集し、その原文自体の意味や、それをふまえた和文の表現とも比較検討することにより、原詩文の、当時に於ける受容のされ方も、より明かにすることが出来よう。

「撥簾」という造語を、白氏は極めて特殊な条件の下に作り出した。従って、中国に於ても一般化はしなかった。この語がわが国に伝えられ、夙に、菅原道真はこれに注目し、その受容に略〻成功した。この先例があったればこそ、平安末期迄、この言葉は生き続けることが出来たといえよう。一方、当然のことながら、この「撥」は訓読され、幾種かの訓のうち、当時、最も理解され易い訓が「マキアグ」であったものと思われる。但し、これは原字の意味とも異なり、従って、必ずしも、白氏の詩情を汲み取るものでもない。

然しながら、実は、これが訓読の運命であろう。白氏新楽府の「時勢粧」は、平安時代、博士家の人により、翻訳されて「イマヤウ

スガタ」と訓まれ、以来、江戸時代に至るまで生命を保ち、他の訓は忘れ去られた。実は、この訓も原文字に即したものではない。

白氏香鑪峯下の詩（「撥簾」）の受容も、原文にとっては功罪相半ばする翻訳としての訓と、その命運を共にする。清少納言の故事の如きは、その一齣に過ぎない。そこには、原作と、その翻訳とを繞る、常に新しい問題が存するのである。（一九七三年十月一日稿）

〔補〕 成稿後、若干の時間的余裕があったので、更に、和漢朗詠集鈔本を調査し（無論、この外、鎌倉時代鈔本をも含め、訓点の施されていないものも少なからず存する）、次に挙げる訓点本を、主題に関する資料として増補する。〔　〕内はその略称である。

〔正嘉本〕…桂泰蔵氏蔵正嘉二年(1258)菅原長成点本二軸　〔天理本〕…天理図書館蔵南北朝写本一軸　〔天理暦応本〕…同蔵暦応二年(1339)写本一帖　〔天理貞和本〕…同蔵貞和三年(1347)安倍直明点本二軸　〔岩瀬延慶本〕…岩瀬文庫蔵延慶二年(1309)写本二帖　〔岩瀬延享本〕…延享元年(1744)柳原光綱自筆本一冊　〔穂久邇本〕…穂久邇文庫蔵〔鎌倉末期〕写本二帖　〔陽明文庫本〕…陽明文庫蔵 鎌倉中期 写本二軸　〔東大覚源本〕…東京大学国語研究室蔵伝二条覚源法師筆鎌倉写本一軸　〔東大天正本〕…同蔵天正三年(1575)写本一冊　〔東大残花本〕…同蔵戸川浜男氏旧蔵〔室町末〕写本一冊　〔日大延徳本〕…日本大学図書館蔵延徳三年(1491)写本二帖　〔早大弘治本〕…早稲田大学図書館蔵弘治三年(1557)写本一冊　〔早大永禄本〕…同蔵永禄六年(1563)写本一冊　〔東教大元亀本〕…東京教育大学図書館蔵元亀三年(1572)写本二冊　〔蓬左文庫二条本〕…蓬左文庫蔵伝二条為重筆室町写本二冊　〔蓬左文庫山崎本〕…同蔵伝山崎宗鑑筆室町写本二冊　〔京大本〕…京都大学附属図書館蔵〔室町末〕写本一冊　〔京博世尊寺本〕…京都国立博物館蔵伝世尊寺行季筆室町写本二軸　〔学習院本〕…学習院大学国語研究室蔵〔室町末〕写本一冊　〔学習院三条西本〕…同蔵三条西家旧蔵〔江戸初〕写本一冊　〔金刀比羅宮本〕…金刀比羅宮蔵〔室町末期〕写本一冊　〔東北大本〕…東北大学図書館蔵享禄(1530)三年写本一帖　〔国会菅家本〕…国立国会図書館蔵文化(1814)十一年菅原長親校本二冊　〔有栖川宮本〕…高松宮家御所蔵旧有栖川宮御本貞享(1685)二年写本一冊　〔有栖川宮一本〕…同御蔵江戸写本一冊（有栖川宮本は二本共マイクロ・フィルムによる）　〔陵一本〕…宮内庁書陵部蔵（150—132）（模近写）一冊

次に、以上の二十七本と、既に本文に挙げた十七本とを合せ、訓の施され方を、その施された位置や、朱墨を区別して、分類、表示

すれば次の通りである。和漢朗詠集の訓点に関する系統上の研究が進めば、この表示は、更に整理されるであろうが、いまは、手を加えずに、総ての用例を列挙する。凡例的事項を挙げれば、

一、これは、右傍、及び、右傍内側の訓により分類する。

一、例えば、「簾ヲ」「撥（カ、ケテ）」の、送仮名の「ヲ」と、ヲコト点の翻記としての「を」とは区別せず、総て片仮名で表記した。また、「カ、ケ」とあって、ヲコト点「て」の施されていない場合も、特に区別しなかった。

一、訓のうち、（　）内のものは、朱書であることを示す。また、注記を要する個所には「＊」印を施し、後註を附した。

〔カ、ケテ〕

(1) 撥（カ、ケテ）レ簾ヲ　管見抄本・天理本・東急本・尊経閣寂本・山田本・東教大元亀本・陵森谷本・金刀比羅宮本・学習院三条西本・岩瀬延享本・有栖川宮本・陵一本・陵寛永刊本＊

(2) 撥（カ、ケテ）（スタレ）レ簾ヲ　蓬左文庫山崎本＊

(3) 撥（カ、ケテ）（マキアケテ）レ簾ヲ　天理暦応本・穂久邇本・日大延徳本

(4) 撥（カ、ケテ）（マキアケテ）レ簾ヲ＊　正嘉本

(5) 撥（カ、ケテ）（マキアケ）（ツイハテ）レ簾ヲ　東急菅本・陵伏見本＊

(6) 撥（カ、ケ、ケ）（マキアケ）レ簾ヲ　国会菅家本

(7) 撥（カ、ケテ）（ツイハテ）レ簾　尊経閣二条本

(8) 撥（カ、ケテ）（マイテ）レ簾ヲ　学習院本

(9) 撥（マキアケテ）（カ、ケテ）レ簾ヲ　天理貞和本＊

(10) 撥（カ、ケテ）（マキアケテ）レ簾ヲ　京大本

(11) 撥（カ、ケテ）（マキアケテ）（ツイハテ）レ簾ヲ＊　東大天正本

〔アケテ〕

(12) 撥（アケテ）レ簾ヲ　早大永禄本・内閣本

(13) 撥（アケテ）（マイテ）レ簾ヲ　東大残花本

(14) 撥（アケテ）（カケテ）レ簾（ミスラ）＊　早大弘治本

〔マイテ〕

(15) 撥（マイテ）レ簾（タレ）　東大覚源本

(16) 撥（マエテ）レ簾ヲ　教順本＊

(17)撥(コイテ)レ簾ヲ　有栖川宮一本
(18)撥(カヘケテ)(ヘイテ)レ簾(カヘケテ)*　陵安貞本
〔ツイハテ〕
(19)撥(ツイハテ)レ簾ヲ　蓬左文庫二条本
(20)撥(ツイハテ)レ簾ヲ　寛正本
(21)撥(カヘケテ)レ簾(ツイハテ)*　静嘉堂本
(22)撥(ツイハテ)レ簾ヲ　陵別本*
(23)撥(マキアケテ)レ簾(カヘケテ)(ツイハテ)(スタレヲ)　岩瀬延慶本
〔ヲシハテ〕
(24)撥(ヲシハテ)レ簾ヲ　陽明文庫本・陵又本
〔ケテ〕*
(25)撥(ケテ)レ簾ヲ　東北大本・国会本
〔テ〕
(26)撥(カヘケテ)レ簾ヲ　京博世尊寺本

(註)(1)この外、注釈書ではあるが内閣文庫蔵和漢朗詠集抄にも「カ、ケテ」の訓がみえる。(2)京都府立総合資料館蔵和漢朗詠集私注弘治三年写本には、右傍内側「アゲテ」、外側「カ、ゲテ」、左傍「マキアゲテ」が施される。私注刊本は多く「アゲテ」が施されているので、(2)と同じ二訓が、別に施されたのかも知れない。(4)左傍「マキアケテ」には朱合点を施す。(5)岩瀬文庫蔵和漢朗詠集私注刊本には、松永尺五が「菅家深秘之書」から訓を朱書している。刊本の訓「アケテ」(右)の外側に「カ、ケテ」、左傍に「マキアケ」(内)「ツイハツテ」(外)を加う。この菅家の訓は、東急菅本と同じである。(9)「マキアケテ」の合点は朱筆。京都府立総合資料館蔵朗詠私注の別本〔江戸初〕写本には、右傍に「マキアケテ」一訓が施されている。(11)東大天正本は、初め墨訓「マキアケ」が右傍に施されており、後朱筆にて「マキアケテ」「カ、ケテ」の二訓が加えられた。従って、「マキアケテ」は、墨訓の上に、同じ朱訓が重ねられている。(14)右傍外側の訓「カ、ケテ」及び「ミスヲ」は淡墨筆。異筆であろう。(16)岩波文庫本所収、黒木安雄氏旧蔵朗詠注抄に「マイテ」あり。京大図書館蔵朗詠寛永五年刊本(近衛本)に、朱筆「マヒテ」が加えられている。(17)「コイテ」は「マイテ」の誤写であろう。(18)「マイテ」・(21)「カ、ケテ」、共に合点を施す。(22)岩波文庫本所収、飯島花月氏旧蔵長禄年間写本に「ツイハテ」あり。(25)この「ケテ」は、「アケテ」「カ、ケテ」「マキアケテ」の何れとも解し得る。

以上、和漢朗詠集鈔本四十四本に施された六訓を表示したが、更に、各訓の時代別・朱墨別延べ総数を示せば次の通りである。尚、本奥書に年号のある場合は、それに従った。

	（鎌倉・南北朝）	（室町）	（江戸）	（近写・刊）
カ、ケテ*	（墨）2	11		
	（朱）2	13	4	2
マキアケテ	（墨）1	6		
	（朱）	4		
アケテ	（墨）			
	（朱）	1	3	
マイテ**	（墨）1	1		
	（朱）	4	1	
ツイハテ	（墨）1	3		
	（朱）	5		
ヲシハテ	（墨）	1		
	（朱）	2		

*「カ、ケテ」に重複する「カ、ケ」は一ケに数えた。

**「マヒテ」をも含む。

註

（1）『落窪物語』（巻二）に「少将心地たがひて、例の乗り給ふ車にはあらぬに、朽葉の簾かかげて、男共多くておはしぬ。」の例があるが、これは「懸」と覚しく、校注に、一本「下簾かけて」に作るとある。

（2）白氏文集巻三・四神田本（天永四年点）より、該当個所を若干例示する（語の下は別訓）。

〔巻三〕「眉細長ソヒエタリ」（上陽白髪人）「時ー勢ー粧ソノカミスカタ イマヤウスカタ」（同）「面縛シリヘテニシハラレテ」（伝戎人）

〔巻四〕「一始扶床オシカヽリ」（母別子）「青唇アフラサイテ アフラヌリテ」（時勢粧）「濃粧コヅヤカニ」（塩商婦）

これをみれば、原意に即した訓と、意訳されたものが常に併行していることが知られる。このうち、「シリヘテニシハラレテ」というような、和文風な、一種の意訳が、平安時代博士家のうち、藤原家の訓であるという推

定がなされている。（小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』）

（3）その意味で次のことに触れる。白氏文集巻四（新楽府）「紅線毯」に「太原毯渋（シブウシテ）、毳縷硬。蜀郡褥薄（ノハシテ）錦華冷（ヒヤカナリ）」（神田本天永四年点）とあり、この「渋」は「不滑」の意である。太原産のカーペットはざらざらして硬いというのである。これは対句的に、蜀郡の褥の「薄」「冷」に対する。処が、当該個所は築島裕氏執筆と思われる『新潮国語辞典』を検すると、この「シブイ」を「地味で、よい。きらびやかでなく、よいおもむきだ。」という項の用例に挙げられている。これなどは、原文誤読の例である。無論、「シブイ」には、「不滑」に該当する用例は多く存する。

本文中に掲げた貴重な鈔本の閲覧・調査に関しては、所蔵者各位の御厚情を賜った。こゝに、深甚なる謝意を表す。